

外国にルーツを持つ子どもの学習を支える学生の実践のプロセス

—コーディネーターの省察から—

半原 芳子

要 旨

本稿は、福井大学の学生が取り組んでいる外国にルーツを持つ子どもへの学習支援の展開をコーディネーターである筆者がふり返り、そのプロセスを辿るものである。具体的には、最も長く継続されている中国出身Mちゃんへの支援に注目し、Mちゃんが小1から小4になるまでの2年8ヶ月間の支援の展開を追った。当初学生3人で始まった本支援は、その継続とプロセスのなかでさまざまな人や団体がかかわり、支援が調整され発展・拡大していた。また、Mちゃんだけではなく、支援者である学生の成長も見られた。そこから、今後学生の成長をより良く支えていくために、彼らが実践と省察のサイクルを発展的に積み重ね力量を培っていけるようにすること、そして、それを持続的に支えるコミュニティが必要であるとの示唆を得た。

キーワード：省察、記録化、コーディネーターの力量形成

1. はじめに

日本では、1990年の「出入国管理および難民認定法」の改正後、外国籍住民が増加の傾向にあり、近年では母国の経済不況や政情への不安から滞在の長期化・定住化が進んでいる。それに伴い日本の学校に学ぶ外国にルーツを持つ子ども達も増加し、子ども達の背景や状況はかつてないほど多様化かつ複雑化している。移民や難民の受け入れが世界的な喫緊の課題となっている今、日本は現在居住している外国人、そしてこれから来る外国人をどのように受け入れ共に暮らしていくかといった課題に直面していると言える。

杉澤（2009）は、日本がかつてない多言語多文化化を迎えるなか、今後日本人と外国人が共生する社会を築きあげていくには、多様な専門や領域の者達が協働で問題解決を図っていくこと、そのためにその協働を支えるコーディネーターの存在が必要であると強調する。そして、コーディネーターの力量形成のためには実践者（コーディネーター）が自らの実践を「省察」（Schön 1983／柳沢・三輪2007）することが重要であるとしている。また、柳沢（2016）は、専門性の力量形成においては実践の省察と記録化が極めて重要な意味を持つこと、さらにはそれらを実践者が相互に検討し事例研究を定期的に進めていくことを提起している。

現在、筆者は多言語多文化共生社会を志向し、福井大学の学生と外国にルーツを持つ子ども達への学習支援に取り組んでいる。支援を行っているのは主に学生であり、筆者はコーディネーターの役割を担っている。本稿では、学生によって取り組まれている学習支援のプロセスを記述し

報告する。その目的は、一つは筆者自身のコーディネーターとしての力量を培うためである。学生が取り組んでいる支援の展開を辿ることは、すなわち筆者のコーディネーターとしての実践を振り返ることでもあり、そこから支援の意義と今後の展望を探りたいと考えている。もう一つは、多言語多文化共生社会に向け「実践者が実践を相互に検討し事例研究を定期的に進めていく」(柳沢2016) ための共有財産をつくるためである。本稿はコーディネーターである筆者の省察であるが、それを「記録化」したことに意義があると考え。書いたものは話し言葉と異なり文字として残る。そのため、空間や時間を超え他者と共有できる知恵となる。一人一人の実践者が取り組めることや経験できることには限界がある。しかし、他者によって記録されたものが存在することにより人は相手の状況を借りて学ぶことができる。他者の記録を読みながら「自分がその実践の当事者だったらどのような判断をし、どのように実践を展開させたいだろうか」と想像をめぐらせ、状況を読む力や活動を発展させていく力を培っていくことが可能となる。

現在、福井大学の学生とは、大学や近隣の複数の小・中学校で支援を行っている。ここではそのなかで最も長く続いている中国出身Mちゃんへの学習支援に注目する。省察の資料とするのは、支援者である学生の記録とふり返り、および筆者の記録である。

2. 中国出身Mちゃんへの学習支援の展開

Mちゃんは福井市内の公立小学校に通う女の子である。2013年4月、先に来日していた両親が当時6歳だったMちゃんを呼び寄せる形で日本に来た。Mちゃんは両親との3人家族で、母親は市内の中華料理店でコックとして働き、父親は家事をしている。両親は日本語を話さない。

Mちゃんへの支援は2014年3月に始まった。これまで支援を担当してきた学生は以下の通りである。

- ・2014年3月～2015年3月 【2013-2014年度】
 - 中国人留学生Tさん (教育学研究科2年)
 - 中国人留学生Yさん (教育学研究科2年)
 - 日本人学生Hさん (教育学研究科2年)
- ・2015年4月～2016年3月 【2015年度】
 - 中国人留学生Tさん (修了生※前年度から継続)
 - 中国人留学生Oさん (教育学研究科2年)
 - 日本人学生Nさん (教育地域科学部4年)
- ・2016年4月～2017年3月 【2016年度】
 - 中国人留学生Oさん (※前年度から継続)
 - 中国人留学生Jさん (工学部研究生)
 - 日本人学生Fさん (教育学研究科2年)
- ・2017年4月～現在 【2017年度 (現在)】
 - 中国人留学生Hさん (工学研究科1年)
 - 中国人留学生Sさん (教育学研究科交換留学生)

日本人学生Mさん（教育地域科学部4年）

支援者はほぼ年度によって交替しているが、それは卒業が主な理由となっている。学生らはMちゃんの支援を離れる際、次の支援者を探し引き継いでいくことでMちゃんの支援を継続させてきている。本支援はMちゃんの母語である中国語と第二言語である日本語の両方を育てることを主な目的としている。そのため支援者は中国人留学生と日本人学生のペアもしくはチームが基本となる。以下、支援開始当初から2016年度までを辿りながらMちゃんの支援のプロセスを跡づける。

2-1. 「教科・母語・日本語相互育成学習」の開始（2014年3月）

支援は、2014年3月、Mちゃんが小学2年生になる直前の春休みに教育学研究科の院生3人(中国人留学生Tさん、Yさん、日本人学生Hさん)によって立ち上げられた。きっかけとなったのは彼女達が履修していた同研究科の「協働実践研究Ⅰ・Ⅱ」という授業である。その授業で3人は、外国人子女をテーマに協働実践研究を行うことを計画していた。筆者は当該科目の担当教員ではないが、長年外国にルーツを持つ子ども達への学習支援にかかわっていたことから3人の協働実践研究に同行することとなった。

Mちゃんは中国人留学生Yさんの知り合いであった。6歳という低年齢で来日しているため、Mちゃんはこのままだと今後母語の力が弱くなりダブルリミテッド（二言語不十分）に陥ることが危惧された。学生とはそうした状況を共有し、相談の上「教科・母語・日本語相互育成学習」（岡崎1999）を取り入れることとした。それは子どもの母語（Mちゃんの場合中国語）と第二言語である日本語で教科学習を行うものである。教科は国語を選んだ。その一番の理由は、Mちゃんが最も学校でついていけない教科であったからである。また、日本人学生のHさんが国語教育専攻だったことから、学生の力がより良く発揮できる教科であるとの判断もあった。

支援の進め方は岡崎（1999）を参考に、先行学習の形をとった。それはMちゃんの在籍級での学習に先行して学習（支援）を行うものである。

図1は『たんぼぼのちえ』（小2光村図書）の単元での支援で用いられた母語のワークシートである。上に本文の訳文、下に設問がある。Mちゃんは『たんぼぼのちえ』を母語であれば十分に内容を理解することができ、想像力を働かせることができる。ここでは「春天到来,蒲公英会开出什么样的花朵儿呢?（春が来たたらたんぼぼの花はどのように咲きますか?)」、「蒲公英的根茎为什么会低垂到地面呢?（た

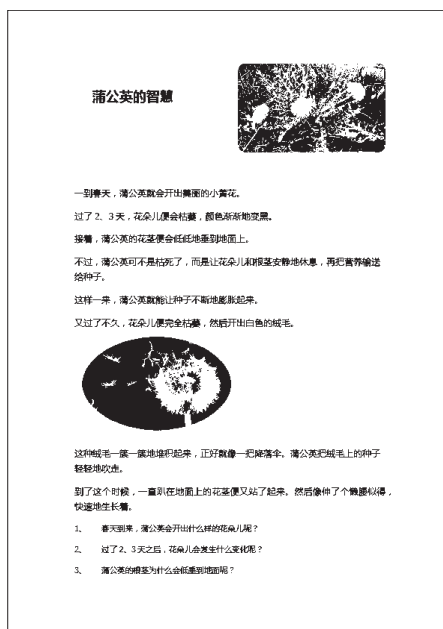


図1 母語ワークシート
(2014年3月使用)

んぼぼの根はどうして地面まで垂れていますか?)」など、本文の内容を読み取りさらにそれを自分の言葉で説明する質問がなされている。支援ではその問いをめぐり、Mちゃんと中国人留学生Tさん、Yさんとがディスカッションを行う。

母語での学習の後は日本語での学習である。すでに母語で内容を十分理解しているが、Mちゃんは来日してまだ1年であるため、内容は分かっているが日本語で自分の思いや考えを表現するのは難しい。図2は『ふきのとう』(小2光村図書)の単元で用いられた日本語のワークシートである。ここでは「このおはなしは いつの じかんの おはなしですか。あてはまる ことばに まるを つけましょう(あさ・ひる・よる)」など、主に内容確認の問題が選択形式で出されている¹⁾。Mちゃんは日本人学生のHさんとやりとりしながら、日本語の言葉や表現を獲得していく。こうして先行学習を行った後に、Mちゃんは在籍級での授業を受ける。あらかじめ母語と日本語で内容を理解しているため、クラスでは先生の説明や友達の発言に集中することができる。

週に1回90分のMちゃんへのこうした支援が軌道に乗り始めた2014年4月、学生がある一つの事実に気がつく。それはMちゃんが放課後や週末に一人で遊んでいることであった。心配した中国人留学生のTさんとYさんがMちゃんの両親に尋ねたところ、それは両親が家にいるよう命じているとのことだった。理由は、Mちゃんが日本人の友達の家遊びに行き、もし迷惑をかけても自分達が日本語で謝りに行けないからというものだった。Mちゃんが同年代の子ども達に比べ行動や交流範囲が狭く社会とのつながりが弱いことを案じた学生は、Mちゃんのコミュニティを広げるため、福井大学の学生が取り組む「探求ネットワーク」にMちゃんをつないでいく。

2-2. 福井大学「探求ネットワーク」との連携(2014年度)

「探求ネットワーク」は福井大学の学生が地域の子ども達と行っている探求活動である。1995年から20年以上に渡り続けている。学校5日制の導入に伴い発足したもので、子ども達が土曜日に自ら様々な体験活動に参加するなかで、探求する力・表現する力・問題解決していく力を獲得することをねらいとしている。当時は公開講座として開講されたが、現在は学部の専門の授業科目として積極的に位置づけられている(森他2003)。

現在、探求ネットワークには「かみすきブロック」や「もぐもぐブロック」、「それいけ探検隊ブロック」など9つのブロックがあり、小学4年生から高校3年生までの子ども達約300人が参加している。5月から12月までの8ヶ月が3つのサイクルで構成され、活動は基本的に第2・第

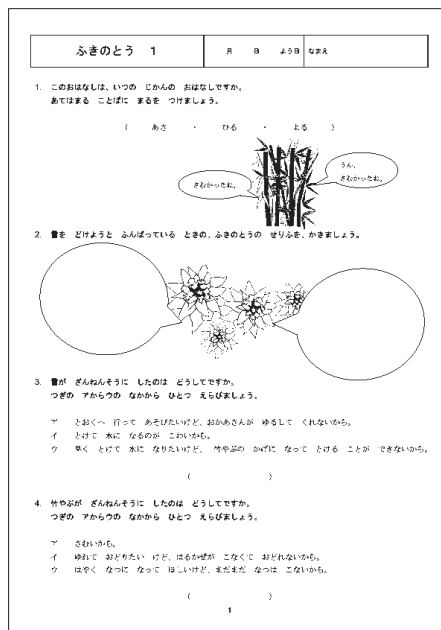


図2 日本語ワークシート
(2014年3月使用)

4土曜日の午前中に行われている。夏（夏サイクル）にはキャンプや合宿、春（春サイクル）と冬（冬サイクル）には学習の成果を発表するおまつりがある（福井大学教育地域科学部探求ネットワーク2014）。探求ネットワークであればMちゃんのご両親も安心してMちゃんを外で活動させることができるだろうと考えた学生は、探求ネットワークを紹介し承諾を得、Mちゃんは2014年5月に探求ネットワークに入ることとなった。

Mちゃんは地元の伝統工芸である紙すきを活動のメインに据える「かみすきブロック」に入った。かみすきブロックでは毎回あるテーマに基づき、自分達で紙をすきオリジナルの紙や作品を作る。当時、このブロックには小学生から高校生までの子ども達が30名ほど参加しており、Mちゃんは一番年下で、また唯一の外国籍児童であった。

以下は「かみすきブロック」でのある日のやりとりである。この日のテーマは「すごく〇〇な紙」で、Mちゃんの班は「すごく光る紙」を作成することとなった。みんながいる所から少し離れた場所にいろいろな素材や材料が置かれている。MちゃんはT君と学生スタッフと一緒に素材選びをしており、青とオレンジのビニールテープに目をつける。それを班に持ち帰り、みんなの意見を聞いている場面である。

M：絶対破れないあの牛乳パックとか使っていい？もっと私らしか使わない最新手段

T：（ビニールテープを触りながら）ほらぐちゃぐちゃ

スタッフ：使えそう

M：使えそうねー

[班のみんながいるところに戻って]

M：青とオレンジのテープ、これとこれ、どっちがいい？

スタッフ：どっちもいいね

M：じゃ、みんな集まって

[みんなが顔を寄せる]

M：どれがいい？決めて。（オレンジのテープを持って）じゃあこれがいい人？

[何人か手を挙げる]

M：何人ある？（青のテープを持って）じゃあこれがいい人？

[一人手を挙げる]

M：オレンジがいい人、青がいい人・・・

スタッフ：オレンジでやってみよっか。待って、（このオレンジのテープで）何するんだっけ？

（2014年5月24日 筆者の観察ノートより抜粋）

ここでは、Mちゃんは他の子ども達やスタッフとの協働のなかで、自分から提案したり、仲間の意見を聞いたり、相手の意見を吟味したりしている。また、この日スタッフとの間で以下のようなやりとりがあった。

スタッフ：ウォーシーリーベンレン（＝中国語で「私は日本人です」）

M：中国人じゃないでしょ。（発音を直す）ウォーシーリーベンレン

スタッフ：###（中国語で何か言う）

（Mちゃんとスタッフとの間で中国語によるやりとりが少し続く）

（2014年5月24日 筆者の観察ノートより抜粋）

これは第二外国語で中国語を勉強している男子学生がMちゃんに中国語で話しかけ、Mちゃんはその学生に中国語を教えている場面である。探求ネットワークの学生は、Mちゃんが中国出身であり中国語が母語であることをMちゃんの個性として積極的に捉え、大切にされた。また、Mちゃんの父親が迎えに来るとブロックのリーダーの学生や高校生が駆け寄り、談笑する姿があった。Mちゃんが探求ネットワークに入ったことで、Mちゃんの家族もまた日本社会との接点が広がっていった。

こうしてMちゃんは週に1回放課後に「教科・母語・日本語相互育成学習」、月に2回土曜日に「探求ネットワーク」の活動で福井大学にやってきた。両者の学生はゆるやかにつながりMちゃんの成長に同行した。この時期、「教科・母語・日本語相互育成学習」では、「コミュニケーション活動」というものが取り入れられるようになっていった。Mちゃんは特に日本語支援の時間に、自分の気持ちを日本人学生のHさんに伝えるため身振り手振りを駆使していた。学生はそうしたMちゃんの姿勢を大事にしたいと考え、毎回支援の終わりの10分ほどを「コミュニケーション活動」の時間にするようになった。当初は学生主導で行われていたが、次第にMちゃんが主導するようになっていった。活動にはいくつかバリエーションがあるが、なかでもMちゃんは「言葉あてクイズ」が大好きだった。それは、出題者がホワイトボードにある一つの単語（例えば「いるか」）を書き、それを表現者がジェスチャーで回答者に伝えるというものである。はじめは具体物を表す一つの単語だったものが、Mちゃんによって文章や抽象的な言葉へと難易度が上げられていった。活動に没頭するあまり、父親が迎えに来て活動をやめないことがしばしばあった。コミュニケーション活動はMちゃんと学生によって大事にされ、その後2年間に渡り続いた。

Mちゃんと学生達は、天気の良い日は教室を飛び出し校内の散歩に出かけた。福井大学には四季折々の草花が至る所にある。それらの名前を中国語と日本語で学んだり、散歩して発見したことを作文にまとめたりすることもあった。こうして支援はMちゃんと学生達によってどんどん工夫され、Mちゃんの思考や感情を耕すものとなっていった。

2-3. 学校と探求ネットワークとの調整のなかで学習がデザインされる（2015年度）

2015年3月、支援を立ち上げた中国人留学生TさんとYさん、日本人学生Hさんが卒業した。Mちゃんへの支援は、もとは3人が教育学研究科の授業「協働実践研究Ⅰ・Ⅱ」において、外国人子女をテーマに協働実践研究を行うために計画・実施されたものであった。3人は卒業する自分達に代わりMちゃんの支援をしてくれる学生を探した。その頃、Mちゃんへの支援とは別に、市内のK中学校にて教育地域科学部の学生達が外国にルーツを持つ生徒への支援を開始していた。

そこにかかわってくれていた教育地域科学部4年のNさんが、Mちゃんの支援を担当してくれることとなった。Nさんは将来国語の教員になることを志している女子学生であった。母語支援者はすぐには見つからず、中国人留学生のTさんが卒業後も就職活動のためしばらく日本にいたとのことで、Mちゃんの支援の担当を数ヶ月継続してくれることとなった。

新年度（2015年度）となりMちゃんは小学3年生になった。Mちゃんへの支援はNさんが加わったことで、新たな展開を迎えた。それは学校のカリキュラム（学習内容や夏休みや冬休みといった長期休暇、学校行事等）に加え、「探求ネットワーク」の活動計画が意識され工夫が施されるようになったことである。Nさんは探求ネットワークを2年間行った経験を持っていた。これまで、Mちゃんへの支援は学校での学習を先行して行うものであるため、学校のカリキュラムは学生達によってよく意識されていた。そこに、探求ネットワークの活動計画を熟知しているNさんによって、探求ネットワークの活動やそこでのMちゃんの状況を見据えた支援が意識されるようになった。具体的にはこんなことがあった。探求ネットワークでは夏や秋にキャンプや宿泊合宿を行うことが多いが、2015年度Mちゃんの所属している「かみすきブロック」も夏に1泊2日の宿泊合宿に出かけることとなった。小3のMちゃんにとって宿泊合宿は初めてであることに加え、探求ネットワークのメンバー（子ども、福井大学の学生）はMちゃん以外みんな日本人であることから24時間以上日本語ばかりの環境となる。Mちゃんは普段学校では日本語環境であっても、家に帰れば母語環境となる。しかし合宿では母語は使えず、ずっと日本語ばかりとなる。そのことをよく分かっていたNさんは、宿泊合宿の次の回の支援では母語中心の支援を提案した。それは宿泊合宿で日本語のみの環境にあったMちゃんに、母語の時間および力を回復するねらいを持ったものであった。その日の支援では、Mちゃんは始めから終わりまでほぼずっと中国語を使っていた。このように「教科・母語・日本語相互育成学習」の支援は、学校と探求ネットワークのリズムとの調整のなかで工夫がされていった。

年度の途中、母語支援者が交替した。これまで支援をしてくれていた中国人留学生Tさんが忙しくなり支援にかかわることが難しくなったためである。Tさんに代わって中国人留学生Oさんが、Mちゃんの支援を担当してくれることとなった。Oさんは教育学研究科1年の女性の院生である。TさんとOさんは中国の同じ大学の出身で先輩・後輩の関係にあったが、Oさんに声をかけたのは日本人学生のNさんだった。後で聞いた話であるが、Nさんは教育学研究科の院生が集まる部屋に行き、Mちゃんの支援をしてくれそうな中国人留学生に声をかけていったという。それに応じてくれたのがOさんであった。院生のOさんと学部生のNさんはそれぞれタイプが違うものの、息がぴったり合っていた。2人はよく相談しながら支援を組み立て、Mちゃんの希望にもよく耳を傾けた。クリスマスやお正月がある冬休みは、特別メニューとして、中国の絵本の朗読や、Mちゃんのリクエストから手作りカルタでカルタ大会を行ったりした。

この頃、Mちゃんは母語の力とあわせて日本語の力もぐんぐん伸びていった。支援開始当初は、日本語の支援の時間では単元の内容を確認することが精一杯であったが、小3の後半になると日本語支援の内容が母語でのものと同様に、自分の言葉で物事を説明したり人物の心情を想像し表現したりするなど高度なものとなっていった。図3は、2016年1月に行った『モチモチの木』（小

3 光村図書)の単元の日本語支援時のワークシートである。ワークシートには、この単元で鍵となる「月」の古い呼び名を調べる問題や、モチモチの木を自分の言葉で説明する問題、登場人物の心情を想像する問題が置かれている。この時のMちゃんの様子について、後日Nさんは筆者にメールで「問題量も自分で考える

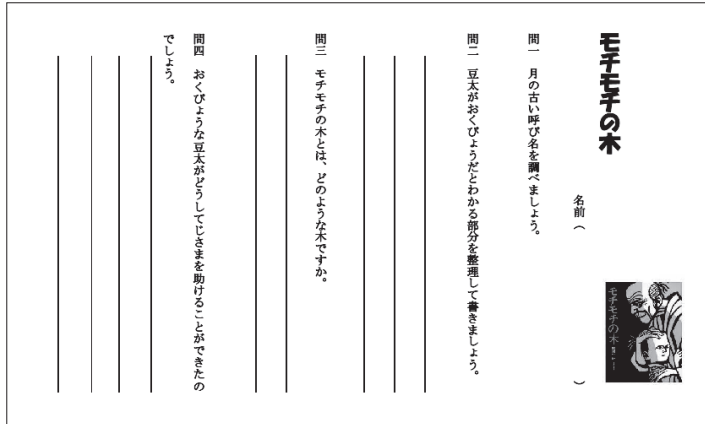


図3 日本語ワークシート (2016年1月使用)

問題も増えたのに、しっかり解いてくれた」と報告してくれた。

また、この年度において初の試みだったこととして、Nさんが2016年2月に行われた「実践研究福井ラウンドテーブル」にて実践報告を行ったことがある。ラウンドテーブルは5～6人の小グループで、お互いの実践を報告・交流するものである。当日NさんはMちゃんへの1年間の支援を約60分の時間をかけ、同じグループとなった県内の公立学校の校長先生や教育委員会の方、県外の定時制高校の先生に報告を行った。教員採用試験に合格し卒業後県内の国語の教員になることが決まっていたNさんは、ラウンドテーブルで様々な角度からの感想をもらったことにより、教員になってからの展望が見出せたとのことだった。

2-4. Mちゃんのコミュニティの拡大と支援体制の拡大 (2016年度)

Mちゃんは「探求ネットワーク」の活動を小学2年生から3年生までの2年間続けたが、新年度(2016年度)となり、進級と同時に探求ネットワークを卒業した。理由は、地域のバドミントンクラブに入ったためである。バドミントンクラブへの入部はMちゃんの強い希望であった。Mちゃんはそこで異学年の子ども達とバドミントンに励むようになった。小学2年生のとき、放課後一人で遊んでいたMちゃんの姿も、またMちゃんを自宅にいるよう命じていた両親の姿もなくなった。Mちゃんの決断は「探求ネットワーク」から次のコミュニティへと世界を広げていくものであり、そうしたMちゃんの成長を探求ネットワークの学生達も喜んだ。

2016年度は、中国人留学生Oさんが就職準備のため、支援準備にこれまで同様の時間をかけることが難しくなった。そのため支援で使用する教材の翻訳(中国語訳)を上海からの交換留学生が担当してくれるようになった。そのことによって、Mちゃんに直接支援を行う直接支援者と、直接の支援を行わないが翻訳を通じ間接的な支援を行う間接支援者の協力体制ができあがっていた。

2017年11月現在、Mちゃんへの支援は3年8ヶ月目に突入した。6歳で来日したMちゃんは当初ダブルリミテッド(二言語不十分)が危惧されたが、学生の継続的な支援のおかげで、現在母

語と日本語の両方を伸ばしながら教科（国語）の力をつけていっている。先述したように母語での支援、日本語での支援ともに論理的な思考や想像力を働かせるものとなってきている。この学習支援をMちゃん自身が非常に楽しみにしてくれている。どんなに暑い日もどんなに大雨の日も休まずにやってくるMちゃんの熱意に学生がどのように応えていくのか、また、目に見えて成長していくMちゃんに学生が今後どのように支援を工夫し更なる展開を見せてくれるのか今後が楽しみである。

3. 学生の成長—日本人学生Nさんの省察—

ここまで中国出身Mちゃんへの支援の展開を跡づけてきた。Mちゃんへの支援では、Mちゃんだけでなく支援にかかわっている学生達も成長している。以下は、教育地域科学部4年生Nさんのふり返りである。NさんはMちゃんが小学3年生のとき（2015年4月～2016年3月）支援を担当してくれた学生である。前節で述べたようにNさんは支援当時、国語の教員になる夢を持っていた。教員採用試験に合格し、現在は県内で教員をしている。卒業する直前の2016年3月、NさんはMちゃんの1年間の支援を次のようにふり返ってくれた（ふり返りの一部を以下抜粋）。

1年間は短かったんですけど、ふり返るとMちゃんの成長がいろいろなところで実感できた1年だったと思います。Mちゃんは身長も1年の間にぐんぐん伸びたし、言葉遣いや感覚も、例えば以前は女の子なのと思うような足の開き方をしていたんですが、それも少しだけおさまりました。そうした様子を見ると、やはり心も大人になっているんだなと思います。また、思春期ということもあって、自分のルーツに対する疑問もあるんだろうなと思います。この1年間、そばで成長が見られたのは本当に嬉しかったです。Mちゃんはもちろん学力も伸びました。字も多少きれいになった気がしないでもないですし、思考力の問題については、支援を始めたばかりの頃には考えられなかったような答えをどんどん出してくれるようになりました。そういうMちゃんの姿を見て、この1年間無駄じゃなかったと感じました。

自分自身の成長をふり返ってみると、やはりこれから教員になるということで、学校に外国の子どもがいることを知っているのと、知らないで教員になるのでは違うと思います。また、E市のある学校は生徒の2割が外国にルーツを持つ子どもだと聞きますが、そうした学校に赴任したとき、このような母語を活用した支援があることや、地域のなかに助けてくれる存在がいることを知っているのと全然違うだろうなと思います。外国の子どものことは他人事ではありません。そうした大事なことについて自分ができることを考えられたので、そこは自分の成長だと思っています。

また、支援をしていてやっぱり一番大切だなと思ったのがチームプレーでした。Mちゃんとのつながりも大切ですが、私と中国人留学生のOさんの関係も支援をしていく上ではとても大切でした。自分で言う तो ちょっと恥ずかしいんですけど、Oさんとは合っていたなと思います。お互いにタイプがまったく違うから異なった影響をMちゃんにしてあげられたと思います。じゃあ、教員になった時、こうして外国の子どものことを一緒に考えるペアが誰になるのかと考えたら、

それは同僚の先生や子どもの保護者さんになると思います。その時はOさんとやったようなことはできないかもしれませんが、そこで諦めずにたくさん話をしていきたいです。そして、気持ちを通じ合わせて、一緒に子どものことを考えられたらいいなと思います。

NさんはMちゃんの成長や現在考え始めていることについて、ゆっくりと時間をかけ語ってくれた。そこには、学校の教員として今後何ができるかについての展望も含まれている。Nさんは、現在県内の学校で教員をしながら、日本人の子どもと外国人の子どもが学び合うインクルーシブ教育を考え進めている。今後、Mちゃんへの支援が続いていくなかで、いつか教員となったNさんと再会し、何かが一緒にできる日が来るかもしれないと期待している。

4. 今後の展望

ここまで、筆者が福井大学の学生と取り組んでいる外国にルーツを持つ子ども達への支援のなかで、最も長く継続されている中国出身Mちゃんへの支援に注目し、Mちゃんへの2年8ヶ月の支援の歩みを辿ってきた。ふり返ってみて改めて気づくのは、本支援には実にさまざまな人や団体が関わっていることである。はじめは教育学研究科の3名の院生によって立ち上げられた「教科・母語・日本語相互育成学習」の支援であるが、「探求ネットワーク」とつながり、また3名の院生の卒業後は複数の中国人留学生と日本人学生がバトンを渡しながらかMちゃんの支援を担い、ここまできている。Mちゃんの支援が長いスパンで継続できているのは、特定の人物や団体によるものではなく、みんなでMちゃんの成長を支え合っていることが大きいだろう。例えば、「教科・母語・日本語相互育成学習」の支援は、大学の夏季休業中は中国人留学生の一時帰国等により支援がしばらく休みとなることがある。しかし、「教科・母語・日本語相互育成学習」の支援が休みでも、Mちゃんは「探求ネットワーク」の活動で大学にやってくる。その逆、つまり「探求ネットワーク」が休止期間中に「教科・母語・日本語相互育成学習」が活動しているということもある。このように複数の人と団体がかわることで、Mちゃんへの継続的で多角的な支援が可能となっている。

また、Mちゃんへの支援において、Mちゃんの成長はもちろんであるが、支援者である学生が力をつけていることにも注目したい。それはNさんのふり返りにおいて確認できることであるが、支援の展開を辿ると、そこには学生達がMちゃんの様子を見て取り、その時々での最適の判断をしていることに気づく。一人で遊んでいるMちゃんに気づき「探求ネットワーク」につないでいったこと、Mちゃんの身振り手振りをMちゃんの大事な表現方法と位置づけそこから「コミュニケーション活動」を取り入れていったこと、初めての宿泊合宿後に母語中心の時間を設けたことなど、それは学生同士がMちゃんのことをよく考え判断していったことである。その判断と行動は実践のなかで培われている力量であると言ってよいだろう。

では、こうしたことを踏まえ、今後筆者は福井大学の学生の外国にルーツを持つ子ども達への支援をどのようにコーディネートしていくとよいだろうか。一つは、学生の力量形成のために「省察」(Schön1983/柳沢・三輪2007)を位置づけたい。今回は学生が行っている支援をコーディ

ネーターである筆者がその展開を跡づけたが、学生は実践のなかでたくさんの判断と挑戦と失敗をし、そして再チャレンジをしている。その積み重ねの上での3年8ヶ月であり、実践の展開である。そうした実践のプロセスや起伏を、今後は実践者である学生自らが掴み展望を切り拓いていけるように支えたい。

そのためには実践と省察のサイクルの発展的な積み重ねと、それを持続的に支える実践者の「コミュニティ」が必要となる。現在、Mちゃんの支援の他に、福井市内の複数の小中学校での支援が展開している。それぞれの場所で出会う子ども達の背景や状況は実にさまざまである。例えば、K中学校には外国にルーツを持つ生徒が複数在籍している。週に1回放課後に学校の教室を借りて支援を行っているのであるが、そこには中1～中3までのフィリピン出身や日系ブラジル人の子ども達が集まる。H小学校では、中学年の児童への支援を行っている。その児童は母親がフィリピン人であるが、フィリピン語をまったく話さない。それは母親が「ここは日本であるから」という理由で、つたない日本語で子育てをしてきたためである。学生達は、その児童のことばの力をどのように育てていけるかを日々模索している。今後は、そうした個々の取り組みをつなぐこと、そして全体で持続的に協働省察・協働探究していけるような「探求するコミュニティ」を学生達と共につくっていききたい。

多言語多文化共生社会はあらかじめそこに存在するものではなく、自分達で耕していくものであることを、学生達の取り組みや姿勢から筆者自身が学んでいる。日々の地道かつ継続的な実践と省察、そしてその相互検討によって、日本に住むすべての人の言語と文化が尊重され保全される社会へと少しずつ歩を進めていきたい。そのためにも、本稿で切り拓いた知見をもとに、また明日からの実践に取り組んでいきたい。

注

i 毎回の支援において準備された訳文とワークシートは学生によって作成された。ワークシートは、長年「教科・母語・日本語相互育成学習」の取り組みを継続的に行っている「NPO 法人子ども LAMP」(佐藤他2013)にて作成されているものを参考に、学生達がMちゃんの言葉の発達の状態を見ながら、Mちゃんと一緒に考えたいと思う設問をつくりだしている。

引用・参考文献

- 岡崎敏雄 (1997) 「日本語・母語相互育成学習のねらい」『平成8年度外国人児童生徒指導資料母国語による学習のための教材』、pp. 1-7 茨城県教育庁指導課
- 佐藤真紀・岡崎眸・清田淳子・原瑞穂・朱桂栄・小田珠生・高橋織恵・半原芳子・大上忠幸・宇津木奈美子・三輪充子・Alexandra Makhraikova・秦松梅・公平・齋瀟瀟・趙有珍・桃井菜奈恵・柏楊 (2013) 「NPO 法人子ども LAMP13年間の軌跡—言語少数派の子どもの学びを支える実践」『言語文化と日本語教育』45、pp. 31-34 お茶の水女子大学日本言語文化学研究会
- 杉澤経子 (2009) 『『多文化社会コーディネーター養成プログラム』づくりにおけるコーディネー

ターの省察的实践』『多言語・多文化協働実践研究』別冊1、pp.6-30 東京外国語大学
多言語・多文化教育研究センター

福井大学教育地域科学部探求ネットワーク (2014)『協働探求者を育むプロセス—子どもたちと
長期にわたる活動から見えてくる探求的学び』、福井大学教育地域科学部社会教育研究室

森透・寺岡英男・柳澤昌一 (2003)「小・中学生と学生との探求活動とその省察—文部科学省フ
レンドシップ事業『探求ネットワーク』報告—」『福井大学教育実践研究』28、pp.127-146
福井大学

柳沢昌一 (2016)「実践と省察のサイクルを通して実践力を培う—福井大学の履修証明プログラ
ム」日本社会教育学会 (編)『地域を支える人々の学習支援—社会教育関連職員の役割と力
量形成』、pp.162-173 東洋館出版社

Donald A. Schön. (1983). *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*: Basic
Books. (柳沢昌一・三輪建二監訳『省察的实践とは何か』2007 鳳書房)

付記

本研究は、次の2つの助成を受けた研究成果報告の一部である。

- ・平成27～29年度科学研究費補助金研究基盤 (C)「日本人住民と外国人住民の共生コミュニテ
ィ形成を支える探究型教育連携モデルの構築」(研究課題番号:15K02637 研究代表者:半原
芳子)
- ・平成29年度福井大学地域貢献事業支援金「外国籍児童生徒への教科・母語・日本語相互育成学
習」(事業責任者:半原芳子)

The University Students' Process of Designing Learning Support System for a Foreigner in a Japanese Elementary School ; A Coordinator's Reflection

Yoshiko Hanbara

This paper discusses how the researcher followed and reflected on the whole process of establishing a learning program support with university students of University of Fukui for minority children with foreign roots, more specifically on the case of M-chan. M-chan is from China and is being supported by these University of Fukui students for two (2) years and eight (8) months already — the longest support program the researcher is handling. The learning support program initially started with only three university students; but has now grown and developed into a much larger scale as more people and various organizations have been involved in the process. Aside from M-chan, the university students supporting her learning have also been maturing — taking a more positive and conscious responsibility to provide better support for her. Hence, in order to actively contribute to these university students' growth, the researcher discusses the cultivation of 'community of inquiry' as a product of accumulated experiences, practices and reflection cycles as a more sustainable model of support for these young practitioners.

Keywords: reflection, practice record, coordinator's practice